

農村での社会主義の勝利のための条件

六、革命的プロレタリアートは、地主、大土地所有者のすべての土地を即時かつ無条件に没収しなければならない。これらの人々は、資本主義諸国では雇用労働力や近辺の小農（ある程度はしばしば中農も）の系統的な搾取を直接あるいはその借地農業者を通じておこなっていて、肉体労働にはすこしも関与せず、その大部分は封建領主（ロシア、ドイツ、ハンガリアの貴族、フランスの復活したセニョール、イギリスのロード、アメリカの旧奴隷所有者）の子孫であるか、あるいはとくに富裕になった金融王であるか、あるいはこれら二つの部類の搾取者や寄生者のあいのこである。

共産党が、大土地所有者から没収した土地にたいする補償を宣伝したり実行したりすることは、まったくゆるされない。なぜなら、ヨーロッパとアメリカの現在の条件のもとでは、それは、社会主義を裏切り、勤労被搾取大衆に新しい貢物を負わせることになるからである。この大衆は、戦争でだれよりも被害を受けたが、一方、戦争は、百万長者の数をふやし、彼らを富ませたのである。

勝利したプロレタリアートが大土地所有者から没収した土地の経営方式の問題についていえば、ロシアではその経済が立ちおくれたために、これらの土地を分割して農民に利用させるのを主として、いわゆる「ソヴェト農場」として維持されたものは、比較的まれな例外であった。このソヴェト農場は、プロレタリア国家が自分の計算で経営にあたるものであり、賃金労働者は国家の委任で働く勤労者となり、さらに国家を管理するソヴェトの一員となる。先進資本主義国については、大農業企業の大部分はそのままにしておいて、ロシアの「ソヴェト農場」の型にならって経営することが正しいと、共産主義インタナショナルはみとめる。

しかしこの原則を過大評価したり、紋切型にしたりして、収奪された搾取者の土地の一部をその近辺の小農、ときには中農にただで譲渡することは絶対にゆるさないとしたら、それは最大の誤りであろう。

第一に、これにたいする普通の反駁は、大規模農業が技術的にすぐれていることを指摘するのであるが、この反駁は、しばしば、議論の余地のない理論的真理を、最悪の日和見主義と革命にたいする裏切りとにすりかえることになる。この革命を成功させるには、プロレタリアートは一時的な生産低下にたじろいではない。それは、ちょうど北アメリカの奴隷所有者の敵であるブルジョアジーが 1863 - 1865 年の南北戦争によって綿作が一時低下するのにたじろがなかったのと、同じことである。ブルジョアにとっては生産のための生産が重要であるが、勤労被搾取住民にとってなにより重要なことは、搾取者をたおし、働くものが資本家のためでなく、自分のために働ける条件を確保することである。プロレタリアートの勝利を確保し、この勝利をゆるぎないものとするところこそ、プロレタリアートの第一の基本的任務である。ところで、プロレタリア権力は、中農が中立化し、小農の全部ではなくとも大多数が支持しなければ、ゆるぎないものとはなりえないのである。

第二に、農業における大規模生産をたかめるところか、それを維持するのにさえ、十分に進歩した、革命的に自覚した、組合組織や政治団体という学校を卒業した、農村プロレタリアを前提とする。こういう条件がまだないところ、あるいは、自覚した、能力ある工

業労働者にこの事業を適当にまかせることができないところでは、性急に大経営の国家管理に取りかかろうと試みることはプロレタリア権力を危くするばかりであり、「ソヴェト農場」を創設するさいには、とくに慎重に、しっかりと準備を整えなければならない。

第三に、すべての資本主義国には、もっともすすんだ国にも、中世の遺物がいまなおのこっていて、大土地所有者は近辺の小農をなかば賦役によって搾取している。ドイツの *Instleute* [小作農]、フランスの *metayers* [分益農]、アメリカ合衆国の刈分小作人（黒人の大部分は合衆国の南部で刈分小作人として搾取されているが、それは黒人だけでなく、ときには白人もいる）が、その例である。こういうばあいには、プロレタリア国家は、これらの小農が小作している土地を、このかつての小作農に無料で利用させるべきである。なぜなら、それ以外の経済的および技術的基礎はないからであり、またそうした基盤を一挙につくりだすこともできないからである。

大経営の財産はかならず没収して、国有財産としなければならない。ただし、このさいには、国営農場の必要を満たしたあとはプロレタリア国家のきめた条件をまもるかぎり、その近辺の小農が無料でこの財産を利用できるようにすることを、必須条件とする。

プロレタリア的変革の直後には、大土地所有者の所有地をただちに没収するだけでなく、彼らを反革命の首領として、また全農村住民の無慈悲な圧制者として、ひとりのこらず追放するか、拘禁することが無条件に必要であるが、プロレタリア権力が都市だけでなく、農村でも強化するにつれて、この階級のなかの貴重な経験、知識、組織能力をもつ人々を利用して（もっとも信頼できる労働者共産党員の特別の監視のもとで）社会主義的大規模農業をつくりだすように、かならず系統的に努力しなければならない。

第 31 卷『農業問題についてのテーゼ原案』P150～152

1920 年 6 月はじめに執筆

ポイント

収奪された搾取者の土地の一部をその近辺の小農、ときには中農にただで譲渡することは絶対にゆるさないと考えたら、それは最大の誤りである。

なぜなら、第一に、勤労被搾取住民にとってなにより重要なことは、搾取者をたおし、働くものが資本家のためでなく、自分のために働ける条件を確保することである。そのために、プロレタリアートの勝利を確保し、この勝利をゆるぎないものとするところこそ、プロレタリアートの第一の基本的任務であり、プロレタリア権力は、中農が中立化し、小農の全部ではなくとも大多数の支持がなければ、ゆるぎないものとはなりえないからである。

第二に、大経営の国家管理には、十分に進歩した、革命的に自覚した、組合組織や政治団体という学校を卒業した、農村プロレタリアがいなければ、農業における大規模生産をたかめるどころか、それを維持することさえできないのである。

第三に、中世の遺物であるかつての小作人に、プロレタリア国家は、これらの小農が小作していた土地を無料で利用させるべきである。なぜなら、それ以外の経済的および技術的基礎はないからであり、また国営農場の基盤を一挙につくりだすこともできないからである。